



2011年3月11日

あの未曾有の災害に直面し

困難な状況と向き合った人々がいた

彼らには、

悲しむ時間さえ無かった

# 遺体

明日への十日間

西田敏行

緒形直人 勝地涼 國村隼 酒井若菜 佐藤浩市 佐野史郎

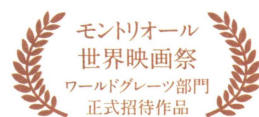
沢村一樹 志田未来 筒井道隆 柳葉敏郎 (五十音順)

原作:石井光太『遺体 震災、津波の果てに』(新潮社刊) 脚本・監督:君塚良一

音楽:村松崇継 エンディングテーマ:SHANTI『Pray for World』

製作:龜山千広 エグゼクティブプロデューサー:種田義彦 プロデューサー:高橋正秀 古部真也 清野真紀 前田久剛  
協力プロデューサー:高井一郎 河端由梨子 撮影:相野直樹 照明:磯野雅宏 録音:柿澤崇 高須真健吾 美術:山口修 記録:中田秀子  
編集:穂垣暎之助 VFX:山本雅之 音響効果:柴崎憲治 監督補:田澤裕一 制作担当:橋本靖 プロデューサー補:大塚加奈  
企画協力:新潮社 製作:Fジテレビジョン 制作プロダクション:FILM 配給:ファントム・フィルム ©2013Fジテレビジョン

reunion-movie.jp



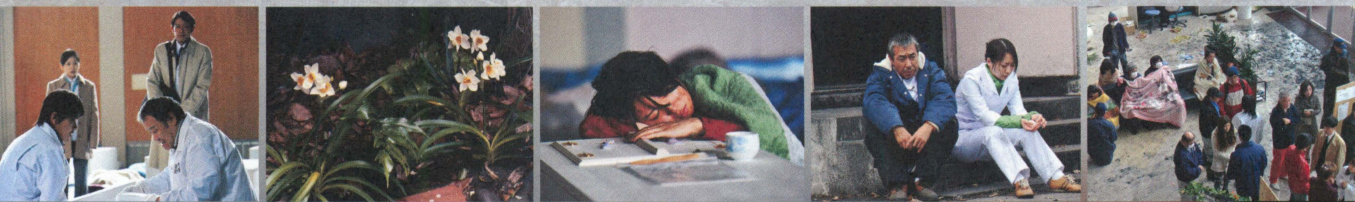


## 一人のジャーナリストが取材した事実を基に 報道が伝えきれなかった真実を描く

2011年3月11日 14時46分18秒 マグニチュード9.0 最大震度7

国内観測史上最大規模の東日本大震災により発生した最大40メートルの津波が、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらしました。舞台となるのは岩手県・釜石市にある廃校となった中学校の体育館。釜石の地形は壊滅的な被害にあった地域と難を逃れた地域が、1本の川を挟んで2つに分かれています。災害が起きた当初、残された市民たちは津波の状況を把握出来ていない中で、同じ町に住んでいた人々の遺体を搬送し、検死、DNA採取、身元確認を行わなくてはならない状況となりました。犠牲になった人たちの尊厳を守りながら一刻も早く家族と再会させるため、懸命に尽くしました。同じ被災者でありながら、つらい役割、現実を担わざるを得なかったのです。

原作はジャーナリスト・石井光太氏の著作『遺体 震災、津波の果てに』（新潮社刊）。当時の報道では伝えきれなかった東日本大震災の知られざる事実を描いたこの壮絶なルポルタージュ本を読んだ君塚監督は、この事実の中にある真実を映像を通して伝えるべきだと確信、製作にあたっては何度も現地を訪ね実在のモデルとなった方々のもとへ足を運び、新たに取材を行いました。「未曾有の災害に直面し、立ち向かった人たちの姿を多くの人に伝えたい。災害や被災地への関心を薄れさせてはいけない。その想いを胸に作りました」と語る君塚監督のもとに西田敏行をはじめ緒形直人、勝地涼、國村隼、酒井若菜、佐藤浩市、佐野史郎、沢村一樹、志田未来、筒井道隆、柳葉敏郎（50音順）ら日本を代表する俳優陣が賛同、後世に遺すべき作品を作りました。



### 主演：西田敏行より

最初にルポの本を読ませていただいた時、「これを映像化するというのは大変難しいことだろう」と思いました。ご遺族の方々の心情を考えると、劇化するというのは「果たして正しいのかどうか」という判断には非常に迷いました。ニュースの映像などで冷静な被害状況や数値は伝わってくる中、被災された方々の本当の気持ちや真実は、逆に劇化する

ことによって“事実”とは違う“真実”が引き出せるのではという想いが沸き立ってきました。そういった想いがだんだんと大きくなり、この作品の映画化のオファーに対し「これは映画化しても良いものだろう」と、決心が変わりました。今、出来上がった作品を観て、そういった「日本人の死生観」を描いたドラマといっても過言ではないと思っています。



# 2013年2月23日(土) 全国公開